

景観フォーラム 10号

日本景観フォーラム会報 10号 (2013年7月1日)

〈巻頭言〉

富士山が世界遺産に登録されました。それも自然遺産ではなく、文化遺産としての登録です。日本列島の長い歴史で富士山ほどそれを見た人々から恐れられ、且つ愛されてきた山岳はないでしょう。富士山がない日本列島を思い描くことが出来ないほど、この山は私達日本人の心の奥深くに住み着いているのでしょう。自然遺産ではなく文化遺産に、なるべくしてなった感を拭い得ません。

一方、鎌倉の世界遺産登録は達成できませんでした。登録活動にご尽力されてきた方々の意が届かなかったことに違和感を持たれる方も多いかと思いますが、グローバル時代の観点から鑑みて“武家の古都 鎌倉”というコンセプトが、平和を提唱する世界遺産委員会に“武家”という提示で良かったのだろうかという問いかけも考え得るのではないのでしょうか。

さて、鎌倉ほど禅の景観と雰囲気醸している場所は世界的に見てもあまりないでしょう。即ち、禅は日本文化の象徴的な華かつ恬であり、“禅の古都”こそが鎌倉に相応しいコンセプトではないかと思えます。

(齊藤全彦)



《予定》

セミナー

- ・7月10日(水) 18:30~20:00 「クルマ社会の倫理的問題と望ましい街空間」
 - ・9月12日(木) 「多摩の景観まちづくり活動」
 - ・11月14日(木) 「テーマ未定」
- 〈会場〉市ヶ谷、JICA 研究所

景観まちあるき

- ・10月26日(土) 多摩地域

特定非営利活動法人 日本景観フォーラム

〒150-0031 東京都渋谷区桜丘町 14-5-502

TEL 03-3780-3814

FAX 03-6379-6681

E-mail info@keikan-forum.com

URL : <http://keikan-forum.com/>

VOICE

●偶然の出会い……………川村 慶太（明治大学3年）



皆様初めまして。明治大学3年の川村慶太と申します。

私が景観フォーラムに入会させて頂いたきっかけは、斉藤理事長との偶然の出会いからでした。私の所属しているゼミナールの担当教授が所属しているとある学会の地域部会の帰りのエレベータの中で斉藤理事長とご一緒したのがはじまりでした。その日は、斉藤理事長より環境に関することや社会のことなど、様々なお話を伺いました。そのお話の中でこの景観フォーラムの存在を知りました。私は、かねてより地域の活性化、持続可能な地域コミュニティの形成といった地域社会の運営について興味を持っていました。私は、経営学部の学生のため、経営学的なアプローチをこれまで行ってきました。ですが、「景観」というアプローチの存在を知り、自分自身の見聞を広めるためにも入会することで新しい自分だけの物事の捉え方を確立できるのではないかと考え、景観フォーラムに入会させて頂くことを決めました。

まだまだ未熟者ではありますが、皆様どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

●景観は目に見えるその一面に過ぎない……………竹之内 康輔（東京大学2年）



学生会員としてこの会に参加することとなりました、東京大学教養学部2年の竹之内です。知人の紹介でこのフォーラムを知り、実に多様なご活躍をなさっている方々とともに、景観について勉強していきたいと思い入会しました。

私は次年度から始まる後期専門課程にて、東京大学工学部都市工学科に進学する予定です。そこで学んだ最新の知識を会員の皆さんと共有できたら、と考えております。

都市やまちにはいろいろな面があります。誤解をおそれずに言えば、景観は目に見えるその一面に過ぎないと思います。どのような景観が美しく、あるいは整然として映るかという部分も重要視されるべきなのですが、そういった魅力的な景観を実現するためにはどのようなことが必要なのか、ということも見落としてはならないと思います。法の整備や専門家の助言、あるいは住民の自発的な努力なども要因として考えられるでしょう。そういった景観を支える存在についてもき

ちんと考察していきたいと思っています。

もちろんこの会を通し、景観を学ぶだけではなく、会員の皆様をはじめとしたいろいろな方と世代を通じて様々な交流ができれば、とも考えております。

● 良き景観があるところ良きコミュニティが存在する……高橋 佳弥（慶應義塾大学2年）



初めまして。この度、日本景観フォーラムに入会させて頂きました、慶應義塾大学2年の高橋佳弥です。

僕の出身である千葉県成田市には1000年以上の歴史を持つ成田山新勝寺、その周辺を取り巻く成田山参道といった古くからある伝統的な街並が今も存在し、多くの人が行き交う光景を目にします。また開港しておよそ35年を迎える成田国際空港は幾多の反対運動に見舞われながらも毎年多くの旅行者に利用されており、幼い頃からこのような近未来的な現代と古き良き歴史の双方が存在する街で育ちました。

今からおよそ10年前、成田山参道は上を見上げれば多く電線が張り巡らされ、道には車が沢山行き交い、多くの歩行者は歩道の無い道を車と接触しそうになりながら歩いており、見る度にとっても雑多な

印象がありました。参道には次第にシャッターが閉まりきった建物が増えていったのを覚えています。そのようなシャッター街となりつつあった参道でしたが、電柱は地中へと埋め込まれ、また歩行者がゆったりと歩ける歩道ができる等、参道には次第に歴史的な景観が蘇り、道行く人々がゆっくりとした時間を過ごせるような場所へとなっていました。

参道の商店街の方々と行政の方々が互いに協力して、このように変わっていく景観を目の当たりにし、

「良き景観があるところ良きコミュニティが存在し、良きコミュニティは良き景観を創造する」という考え方にとても共感いたしました。

良き景観は人々の心に良い影響をもたらし、世代を越えた人の交流だけでなく国を越えた人の交流をも自然に活発にさせてくれるものであると思います。皆様とこれから交流できますことをとても嬉しく思います。

まだまだ未熟ではございますが、今後ともどうぞ宜しくお願い致します。

世界の景観めぐり 第2回

セレブレーション (アメリカ・フロリダ州)

「セレブレーション」はウォルトデズニー社により1996年から開発がスタートした「TND=Traditional Neighborhood Development=伝統的近隣住区開発」による代表的住宅地です。「セレブレーション」では、住宅地以外に、スパニッシュスタイルによる商業ビルやコンドミニウムを含むダウンタウン、セレブレーション・ヘルスと呼ばれる総合病院、学校、ホテルなどが同じTND手法で建設されています。

TNDはニューアーバニズムともいわれ、米国で60年代に盛んに行われたモータリゼーションの拡大に伴う郊外型大規模住宅地開発が、近隣関係の希薄化等の問題を引き起こした反省から、DPZ(アンドレス・ドゥアニーとエリザベス・プラター・ザイバーク夫妻)が提唱したヒューマンスケールの住宅地開発手法です。

この開発手法は、イギリスでチャールズ皇太子により提唱されたアーバンビレッジ運動と相まって、世界的な広がりを見せ、特に米国では1980初頭に始まったDPZによる最初のTND開発であるフロリダ州シーサイドの成功により、急激な広がりを見せ、現在では米国のニュータウン開発の6割はTNDによる開発とされています。

このTND=ニューアーバニズムによる住宅デザインの特徴は以下の事が挙げられます。

- ① 住宅デザインは、ジョージアン、ビクトリアン、クラフツマン等のクラシックなデザインである。
- ② 家の前面にポーチを設け、隣の住宅との間隔を狭くしている。そのため隣同士の交流が行われやすい。
- ③ ガレージは家の前面に設けずバックアレーに設け、極力ガレージと車は人目につかないようにしている。

これらの特徴は、車のまだない時代の美しい都市景観を再現しようとするものです。

このTND開発手法によるセレブレーションでは、住宅のスタイルがほぼクラシックスタイルに統一されているため、街全体の景観に懐かしさを覚え、落ち着きと居心地のよさを感じられます。また、ガレージはすべて住宅の裏側に隠されているため、住宅地の景観を損ねることがありません。



さらに欧米の住宅地の美しさを演出する特徴として、当たり前のように電柱は地中化され、道路からのセットバックは広くとられ、植栽が美しく整えられ、洗濯物が外で干されていることはありません。

日本の住宅地では、駐車場は家の前面に設けられ、玄関は隅で小さくなっています。これでは車が主人公で、人間は従者という感じです。土地の問題があり、日本では米国のようにはいかないと思いますが、新しい住宅地開発では駐車場を一か所にまとめる等、車を人と分離する工夫が出てきても良いのではないのでしょうか。

(小林 均 (株)グローバル研修企画代表)

「この本は、富士山に関する“文化的”なものの総覧である。富士山の文化史と言い換えてもよい。富士山は山であり、それは自然現象である。しかし富士山は、日本列島という人口も比較的稠密な、文化的な伝統にも奥深いものを持っている国に位置している。当然、この偉大な山とその周辺に住む人々との間に様々な形で交流が生まれてくる。」

この巻頭にある著者の言葉がこの書の大枠を一気に表現している。が、その内容たるや、比較文化論の研究者である著者の視線が時間と空間を縦横に駆け巡るといって、その古文書を扱う教養の深さについてゆくのが並大抵ではない。古代の聖徳太子絵伝から読み解く富士山。修験道の祖と考えられる役行者で7世紀に実在したと言われる役小角（えんのおづの）から富士山が古くから信仰の対象であったことを見定め、『性霊集』から日本の各地の山が山岳宗教の対象であったことを証明する。

富士山は現代では唯唯美しい山ではあるが、平安時代の初期の9世紀には大噴火をくりかえして、その後約200年後の『奥の細道』の時代には、暑く燃える山であったという。それを鎮めるために富士山の周りに神社仏閣が点在し、12世紀に入ると富士山は静かな山に落ち着くのである。そして、室町後期のころに多くの人々が富士山の最高峰にまで登っていたということがフランス人イエズス会士ジャン・クラセの『日本西教史』に書かれているという。そして、江戸時代に入ると富士山はその人気異常に盛り上がった時期でもあったという。“富士講”という自治組織によって運営された富士の信仰登山はもしかしたら、明治維新を迎えるための市民意識の盛り上がりの一つであったかも知れない。

富士山は芸術の対象でもあった。『古今和歌集』、禅僧の漢詩文、世阿弥の謡曲『富士山』『羽衣』など。雪舟、池大雅等の画題になり、葛飾北斎の『富嶽三十六景』はヨーロッパ印象派に大きな影響を与えた。

近代に入りこの国はナショナリズムの道具として富士山を用いてしまう。そして、21世紀の今、富士山はやっとその平和のシンボルとして世界文化遺産として登録された。世界自然遺産としては認定されなかったが、人類にとって自然と文化は密接な関係にあるはずであり、人類は“平和”がいかに貴重なものであるかをこれからも富士さんから学ばなければならないだろう。

(斉藤全彦)

